

楽して儲かる農業 もみつけた

2023 May Vol.231

5 月号

役に立つ情報満載!
ニュースレター



静岡農業技術支援協同組合 発行

変化する農業技術

気温が高くなるほど肥料の分解は速くなる!
持続性がなくなる!

玄米アミノ酸微生物農法

玄米アミノ酸微生物農法の資材や安い!
使うほどに効果がでてくる!

玄米アミノ酸微生物農法Q&A

Q. トマトの硝酸態チツソが過剰になりました!

農業経営と世界の変化

化学肥料農法は高温対策に逆行している!

作物

トマトの追肥はスーパーカルシウムと乳酸菌もみがらぼかして樹勢を強くする!



気温が高くなるほど肥料の分解は速くなる！

持続性がなくなる！

肥料は大別して二つである。

化成肥料と有機肥料になる。圧倒的に化成肥料が多い。簡単なのである。化成肥料には顆粒と液肥があるが、双方ともに、よく使われている。またロングと違って、長く肥効が出るようなものもある。気温が上昇すると何が問題になるのだろうか。肥料はたくさん入れるほどに収量が出ると考えている人は、まだいるかもしれない。その肥料が大変な値上がりをしている。これからも価格は上昇していくことになるだろう。その理由は二つある。**世界中で肥料が不足していること、化成肥料の原材料は有限な資源であること**、そして世界中で不足しているということは供給に限界がきているということである。



たくさん肥料を入れたら利益がまったく出なくなってしまうのである。こんな時代が来るなんて誰が予想できたであろうか。

高温多湿時の肥料の問題は根にある。これだけ気温が高くなると肥料の分解が早くなるのである。**特に有機肥料は高温時に一挙に分解をする。**分解をしてチンンにしてしまうと、その後が続かないことになる。また生育を予想して一番、肥料が分解する時を狙って投入する。この高温によって、その時期がずれてしまうのである。化成は効果の出る時期がさらに短い。ロングも温度に反応するように作られている。化

成肥料も有機肥料も、肥料効果が一時に限られてしまうということになる。効果が一時だからと言って大量に投入をしたら、どうなるのか。病害と虫害、連作障害、生理障害のオンパレードになる。



害が多発するだけではない。**土壌が急速に傷むのである。**土壌消毒が、どうしても必要になってしまう。悪循環も悪循環になる。栽培コストだけが上がってしまう、肝心の収量はサッパリになる。これでは利益が出るわけもない。病害、虫害の消毒が高むだけではない。いつまでも栽培が可能なのかという、もっとも大きな問題にぶつかることになる。利益が出ないから、やめるといって話ではない。作物が育たなくなってしまうのである。**土が死ぬといった方が分かりやすいだろうか。**10年以内には、これが大問題になるだろうと思う。澱粉の多い、

ジャガイモやサツマイモ、キャベツ、ハクサイ、ブロッコリーなどのアブラナ科など危険作物になる。連作障害の多い作物も同じである。**一般的に肥料食いと言われている作物である。**



アブラナ科などはおいしいから虫がつくと考えている人は大半である。そうではない。肥料が多くて、土の中でガスが湧くから害虫が出るのである。しかし、肥料を減らすというのは大変な勇気がいる。たいていの生産者にはできない。作物が育たなくなるのではという不安に対抗できないのである。作物は肥料で育つと頑なに思い込んでいる。栄養生長まではそうである。生殖生長になると、肥料だけではなくるのである。やはり、基礎的な知識もなく農業をすることはできないのである。

玄米アミノ酸 微生物農法

玄米アミノ酸微生物農法の資材は安い！ 使うほどに効果が出てくる！

玄米アミノ酸微生物農法は自然資材を基本にしている。

その理由は過剰害が出にくいということである。病虫害の原因になりにくいことも大きな理由である。最大の理由はコストである。資材費が圧倒的に安い。「ある人に言わせる」とタダみたいなもの・・・だそう。露地でも $\frac{1}{2}$ 、施設に至っては $\frac{1}{6}$ ぐらいのコストになるのではないだろうか。しかも少量で効果が出る。その結果少量しか使わないという方が



いる。まだ化学肥料や農薬に頼っているのである。極めつけはマルチである。雑草を防ぐためにマルチをする。そうすると乳酸菌もみながらぼかしの投入が出来な

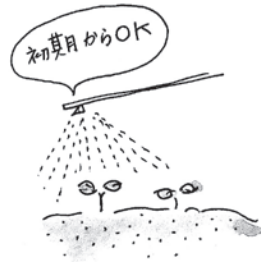
くなる。液肥で対応することになる。

作物の生長からするとマルチは土の呼吸も止めてしまう。さらに雨が降ると通路にあふれる。通路から土の中に入る。そこには呼吸根が張ってくる。だから根も伸びなくなる。このようにマルチには大きな問題が残っていることを忘れてはならない。植穴からガスが出て植物を傷めるのもマルチの性質である。

乳酸菌もみながらぼかしの追肥はとても大切だ。根の張りを良くして、土をやわらかくしてくれる。生長の源泉だ。雑草は、もみながらぼかしを投入する時に一緒に土にすき込めばいいだけである。

玄米アミノ酸ニーム酵素液にしても、**みどりの放線菌**にしても、植物の生長を助けるものがある。農薬のように生長を止め

てしまうものではない。定植期の初期から使ったとしても何の問題もない。カビ病になつたら使つて害虫が出たら使う。それでは遅いのだ。



カビにはもちろん排水対策が重要である。同時に、**カビが出る前からみどりの放線菌を使用したら生長は凄く良くなる。**害虫問題も同じである。植物の生長と害虫は競争だ。植物が弱いほど害虫にやられる。特に定植後1ヶ月は重要だ。この時に植物がしっかりと生長してしまえば害虫は別の畑に行く。寄つてこない。モタモタしているとやられてしまう。早期対策なのだ。**自然資材には使い過ぎによる問題がない。**根もしっかり張らせて、いかに早く生

長させるか。徒長とはまったく違うのである。根の張りも良く、莖も太く、葉数も多く、葉は小さく、色は淡い緑である。しかも生長が早いとしたらこれぞ理想的な姿である。



葉が多く出揃つたら、後は玄米アミノ酸酵素液の葉面散布である。
500倍希釈で10アール100〜150ℓ
できるだけ細霧状で散布する。最低でも週2〜3回。特に定植直後の成長期が勝負なのだ。回数を多くと言っても10アール100〜150ℓで500倍希釈である。金額にしたらいくらになると思うか。計算してみたらいいのである。わずかである。それよりも、その対策によってどれくらい増収になると思うか。必ず採算は取れるのだ。結果が出るかどうか分からない慣行農法とは違うのである。生産することの大変さはよく知っている。だから結果を出してほしいのである。

玄米アミノ酸微生物農法 Q & A

Q トマトの硝酸態チツソが過剰になりました!

ハウスにて、夏秋トマトを栽培しておりますが、土壌診断では、硝酸態窒素が、30mg/Lでしたが、ハウス内で湯き気味の部分あり、生育が悪く硝酸態窒素を試験紙で検査してみたところ、50以上の濃い色になりました。緊急対策として、畝にジャンジャン水を流して、発根を促したほうがわいでしょうか?よろしく願いいたします。



岩手県 M様

A 肥料を一切中止して畝間を耕してください!

チツソ過多の土壌になっていますよね。チツソ過多になると根の発育が悪くなります。しかしその対策がとても重要なのです。水をジャンジャン流すのは最悪で、トマトを殺すようなものです。

- ①肥料投入は液肥も含めて一切やめること
- ②畝間を耕して酸素を入れること
- ③マルチは取ること
- ④最後に一番重要なのは玄米アミノ酸葉面散布を500倍10アール200~300Lを2日に1回やることです。

自然にチツソが減るのを待つしかありません。そうしないと収穫に大きな問題が出てきます。



化学肥料農法は高温対策に逆行している！

稲作が地球温暖化に5%も影響していると知ったら驚くだろう。原因は稲ではない。水を張って作る嫌気性の生物がCO₂を排出するのである。牛のゲップと同じである。世界の中の飼育頭数は17億頭、それがゲップをするだけで気温を上昇させてしまうのである。実感は0である。家畜だから人間の食用である。

農業は全体で24%のCO₂排出量である。電気エネルギーの次に多いとなっている。人間の生活様式を根本から様式を根本から変えない限り、温暖化をストップすることは困難である。原則は変わらない。そうだとしたら人間の方が変化をするしかない。そこで**玄米アミノ酸微生物農法**を考えたのである。そう。は言っても何のことなのやら…。



現在の栽培方法は高温対策に逆行している。そのために病害、虫害、連作障害が多発する。さらに消毒で追い打ちをかける。生育が完全にストップしてしまうのである。すべて**高温対策に逆行していることが原因**である。

玄米アミノ酸微生物農法は微生物の働きを中心にしている。微生物というのは、やや高温の人肌温度36〜40度の温度帯で働**き**が、**もともと活発になる**。一般的に高温で困っている時ほど生育が良くなるのである。

これを基本にして、すべて商品開発をしている。地球温暖化を予測していただけでなく、対策もやってきたということなのである。ただ地球温暖化を学習

したり、ウォッチングしているだけでは何の社会貢献も、できないということなのである。



農業でCO₂の排出が全体の24%だとしたら世界的にも、まったく対策ができていないということである。これから「**持続可能**」かどうかということは分岐点となるキーワードになる。持続不可能なものが数多く出てくるということになる。農業も例外ではないのである。

地球が温暖化する中で、人間の生産または経済活動に例外なんて存在しないのである。なぜなら、人間の活動が地球温暖化という結果になっていることは疑いのない事実だからである。しかも時間がない。タイムリミットは2050年である。もう30年を切っている。そんな

短い時間で人類は、本当に大転換が可能なのだろうか。

テーマが大きすぎて、頭の中が整理できないと思われるだろう。毎月のニュースレターにせよ、このようなことを書くのか、いずれ、近未来で、これがテーマにならない日はなくなるだろう。



ウクライナとロシアの戦争でも、これだけ詳しい情報が入ってくる。地球環境大異変が話題にならないことはなくなる。現在でも、値上げラッシュは続いている。資源が少なくなっているのである。地球温暖化だけではなく、**資源の枯渇という大問題も未解決なのである**。そういう時代なんだということを自覚しては、何もできないのである。こんな時に慣行農法では、あまりにも時代遅れではないだろうか。

作物

トマトの追肥はスーパーカルシウムと

乳酸菌もみからぼかして樹勢を強くする！

トマトは栽培をする人が、とても多い作物だと思う。トマトの**特長は根にある。**とても長く根を張る。排水性が良いことが大切である。稲田を転作する場合でも、ブラソイラなどで深耕して排水を確保してからの栽培が必要になる。主に施設栽培が多いと思う。

苗は接木をするのが普通である。病害の対策と収穫量のためである。五段目あたりから収穫に入る。準備することが多く、**収穫まで4ヶ月も必要とする。**収穫が始まっても病害が多く、消毒の回数も多い。**生育適温が20〜25℃なので、夏場には高温対策も必要になる。**一口に言って栽培が難しい作物である。何が難しくしているのか、原因をしっかりと把握する必要がある。



トマトは果菜類だから追肥が必要になる。それが多過ぎると

病害・虫害の原因となる。肥料過多にするほど、病害も虫害も出やすくなる。肥料が多ければ糖度が上がると思っていた大間違いである。**チッソが多いほど味は落ちる。旨味は光合成でしか作れない。**トマトの糖度を上げるために水分を少なくして、ストレスを与えようという方法をやっている方も多い。これは単に水分が少ないので、果実が大きくならなただけのことである。

トマトは作物の中でも人気の高いものである。栽培する方も多し。そこで間違った方法で栽培している方がとても多いのである。トマトはアンデス高地が原産で、過酷な環境でも育つ作物である。肥料分は少なくても育つ。そのために深く根を張るのである。



トマトを栽培する要点はかわいがり過ぎないことなのである。土を深く耕して**乳酸菌もみからぼ**

かしを投入する。苗を植えたら、**玄米アミノ酸の葉面散布をする。**みどりの放線菌の葉面散布も週一回ぐらいでやる。収穫が出来るようになつたら、**玄米アミノ酸の葉面散布500倍で10アール200Lを繰り返すのみである。**花芽も多く収穫量も落ちない。



追肥はスーパーカルシウム、そして乳酸菌もみからぼかして天然ミネラル鉱石を混ぜて散布するだけである。水分には液肥と**玄米アミノ酸**を1対1で混合して与える。それだけでトマトは十分に育っていく。難しいこともやればやるほど、わけが分からなくなるのがトマトである。単純に考えた方が手間もかからずに、おいしいトマトができる。冬の施設栽培も同じで大切なのは光合成である。夏と同じ糖度のトマトができる。

商品のお申込は **ライフメール**まで

ネットからのご注文はこちら
※ネット決済が可能になりました



玄米アミノ酸微生物農法・商品一覧
<https://aminofarming.com/collections/products>

玄米アミノ酸微生物農法
<https://aminofarming.com/>

FAX ☎0120-870-442 <24時間FAX受付中>

お問合せはメールかFAXでお寄せください！

Mail info@shizuoka-agrisupport.org

<24時間メール受付中>

静岡農業技術支援協同組合

〒422-8034 静岡県静岡市駿河区高松2-15-26

月～金 (9:00～17:00) 土・日・祝・年末年始(休業)